

るべし、仍て今天恩、母倉、月德三ツの吉日を記して、知しむるものなり、
 一彼岸の中日は、晝夜等分にして、天地の氣均しき時なり、前曆の注する所是に違へり、故に今よ
 り其誤を糺し、是を附出す、依て前曆の彼岸と春は進之、秋は三日す、むものなり、
 一晝夜を分つこと世俗の時取惑多し、仍て一たび翌の字を附出すといへども、なほ其惑解がた
 し、故に夜半より前を今夜と記し、夜半より後を今曉と記すものなり、

土御門 從三位陰陽安部泰邦

門人 澀川圖書

天文生源光洪

明和四年丁亥

今まで頒給ふ所の曆、日月食三分以下は記し來らず、此たび命ありて、淺食といへども、ことごとく記さしむ、えかれども新曆しらべいまだをはらず、よりに今までの數にならふのみ、

〔春湊浪話〕雲珠を年號に畫

曆のとしの上に、雲珠を畫くことは、是を尊みてかふむらしむるなり、推古紀に、皇子諸王諸臣悉以金髻華著頭とありて、釋日本紀に、宇須は玉冠と注して、昔の冠なり、其形、今も賀茂祭の飾馬に残れり、使の次將是に乗給ふ時は、雲珠を放ちて、手振の放免に雲珠をば持しめらる、も、冠に擬したる故に、憚給ふ也、

〔鹽尻 三十五〕一曆家、春秋の彼岸會を書する事久し、昔は春分秋分の日を、中日にあたるやうにせし事、安倍家の曆本に見ゆ、近世は春秋二分より三日目をその初にし、六日目を中日とす、九日目を終りとす、古へは彼岸に入る日、没日に値れば、一日を延て、次の日を入りとせし故實なり、貞享曆、没日を用ひず、いつとても二分一日を隔て、彼岸の初とす、